

ホノルル市の近郊農業地区マノアにおける戦前の日本人

飯 田 耕二郎

はじめに

ホノルル市のマノア地区は前号（『大阪商業大学商業史博物館紀要』第二号）で紹介したモイリリ地区の東北側にあたり山に近く溪谷の様相を呈しており、今でも田園風景の残る地域である。ここに戦前から日本人が多数居住し、おもに野菜や草花を栽培してホノルルの市場に出荷していた、いわば近郊農業地域であった。本稿では、マノア地区について書かれた書物や当時の新聞記事、日本人年鑑あるいは彼等が残した日誌や回想記などを利用して、ここに住んだ日本人がいつころからどのような生活を営んでいたかを明らかにしたい。

一・マノア地区の概況

まず、一九二〇年発行の『最新布哇案内』（布哇案内社）で当時のマノア地区のあらましについてみてみよう。

【マノア谿】（一名虹の谷） 市の東方に当って居る。頗る伝説に富んだ谿で、今は白人富豪の住宅地と成て居る。其家屋と庭園は何れも華麗を競ひ、宛然一大公園の感がある。殊に道路の完備せる事はホノルル市一等で、下町杯には容易に、比すべき処がない。此谿に入ると、緑の色まで鮮かに生き生きとし、幽邃云ふべからざるものがある。そして、七八月の交は並木のポーケンベリアの花が、万緑中に真紅を染めて居る。ホノルルに於て一番雨の多い谷で、従つて名物のお天気時雨が多く、虹を毎日のやうに見せて居る。緑の色

の美しいのも、此雨の爲めであらう。そして四時暑気を感じず、寧ろソゾ口寒さを覚ゆる気候のよい処である。

マノアを遊覧せんとする者は、マノア遊覧は自動車に越したものは無い。けれど馬車亦可、電車共によいのである。電車なれば只其一線の空気に接するの外はない。それでもマノアの風物に酔ふ事は出来る。下町から電車で遊ばんとするものは、先ずプナホー行に乗るのである。(中略)マノア行は此処で乗り換へるのである。(中略)それに乗ると、直ぐに風致がよくなつて来る。或る人が之れから奥が人間の住む処抔と、皮肉つた話さえある。実に何とも云へない、涼しい風が吹き、身が引緊まつて来る。清い景色に打たれて十分計りも走ると、終点に達する。谿はまだ奥へ深い、が、終点からは住宅が少なくなつて、同胞等の野菜園で充たされ、田園生活者計りである。徒歩で行けば三十分で、其谷のドン底に達する。路傍にはオヒアの野生樹が繁茂して、八九月の候になると盛んに実を結んで居る。(傍線は筆者)

マノア地区は市の東方にあり、中心部のダウスタウンとは違つて田園風景が広がり、さながら避暑地のようで、当時は白人を中心とした富豪の邸宅が並んでいた。また日本人も谷の奥の方で野菜など栽培に従事していたことがわかる。

図1は武居熱血『ホノル、繁昌記』(本重眞壽堂、一九一一年)に収められている地図のうち、マノア地区についてのものである。当時

は谷奥の方は住居がほとんどなかつたためか、モイリリに近い部分のみ住宅が記載されている。しかしそこも白人の邸宅が所々に点在し、日本人の家もまだわずかであることが読み取れる。また、マノア日本人小学校が官立の小学校の傍にすでに存在している。

一九二〇年代になり日本人を中心にして次第に人口が増加していった。一九三〇年の米国勢調査によると山に近い上部マノア(Upper Manoa)地区で日本人は一〇八九人で全体人口の四六・七%、またモイリリに近い低地マノア(Lower Manoa)地区では二二六〇人で全体人口の四七・八%を占め、いずれも半数近くが日本人であった。

二.二〇世紀初頭の日本人

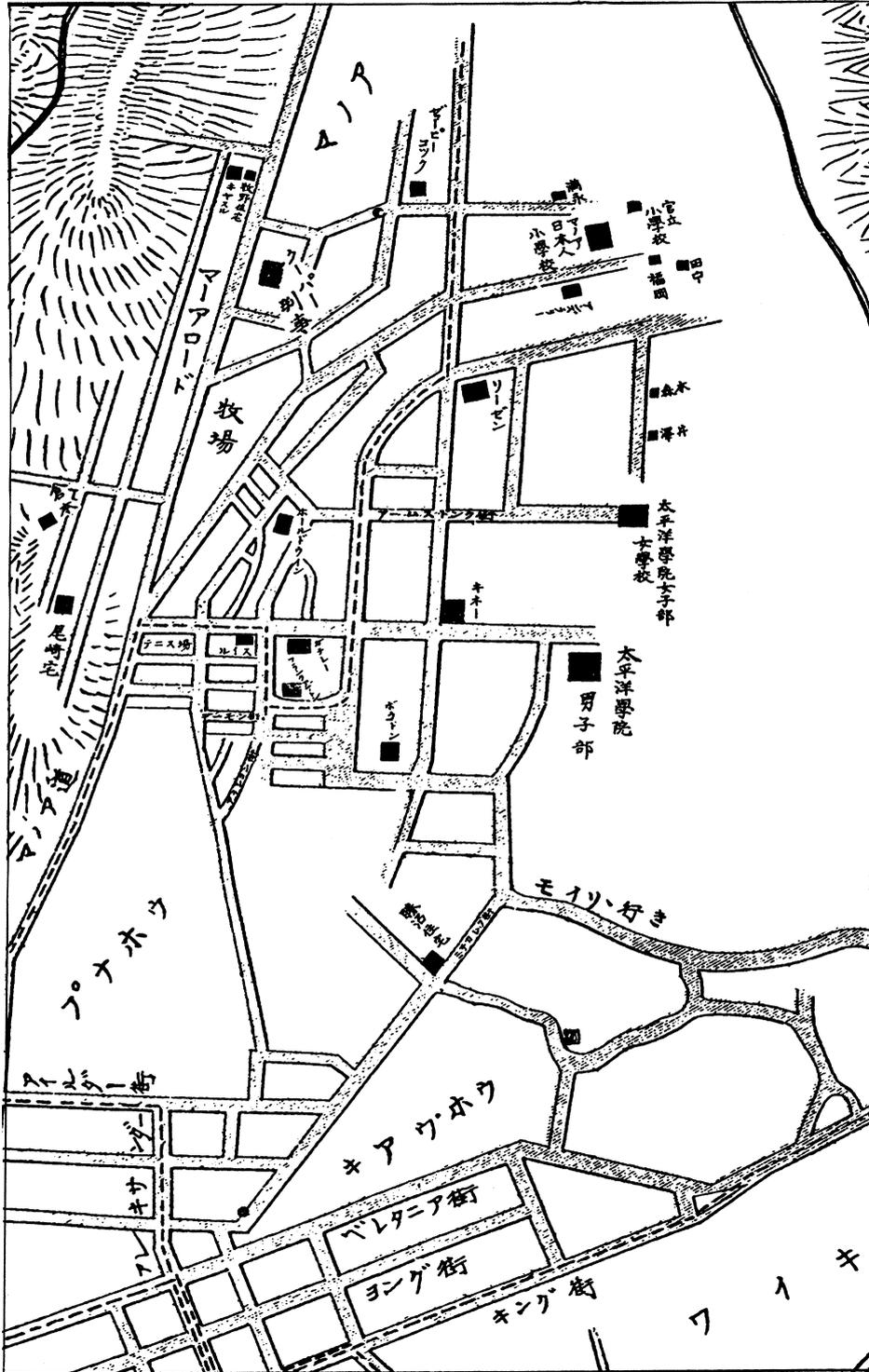
①『MANOA — THE STORY OF A VALLEY』にみる日本人と日本語学校

まず右記の英文の書物によつて、この地区への入植の経緯と日本語学校の設立についてうかがい知ることができる。

東マノアの日本人と日本語学校

一世と呼ばれる日本人移民の最初の世代は、最後の主要なエスニック・グループとしてマノア谷に移ってきた。日本人より先に来た中国人と同様に、或る一世達は砂糖プランテーションを離れて、当時アジア移民に開放された職業を探そうとしていた。農業や家畜

図1 マノア方面地図



『ホノルル繁昌記』(1911年)にもとづき原寛氏が作図

の飼育、熟練・未熟練労働の勤め口、家庭奉公などである。マノアに最初にやってきた日本人はおそらく世紀転換期の頃であり、一世夫婦がマノアに来て、カレッジ・ヒル地域の新しいハオレ（白人）居住者の家庭奉公人として働いた。プランテーションを離れるやいなや男達は雑役夫や庭師となる一方、彼等の妻は料理人、子守、洗濯人として仕えた。これら一世の家族の多くは子供の時に次のようなことを覚えていた。プランテーションの時には食卓に塩魚しかなかったが、雇い主の家からの残り物として時々、ローストビーフやハムを楽しんだ。

耕作する機会が限られていたマノア谷の中央に住んだ日本人は、しばしば東マノア・ロードの店や家庭奉公からの収入を得た。一九一七年に生れマノアに永く住んでいた或る日本人は、現在ノエラニ・スクール（地図②の欄外下中の辺り）のある地域にあったマグリーン・キャンプという日本人居住地で育った。彼の父はパロ口谷から数家族の雑役夫になるためにやってきた。母は洗濯を引受けました。彼は思い出して言った。「本当にそれで私達の生計を立てていました」。他のマノアの住人は洗濯屋の独特の臭いを覚えている。マノアでよく降る雨のため、洗濯物は家の中や軒先で乾かした。「これら洗濯女の家の多くは二層であった」とマグリーン・キャンプの住人は思い出して言った。「階上部分は家族用で、踏み固めた地面の階下部分は洗濯物を干すためにあった。その臭いは土のようであった」。洗濯物は息子たちによって手押し車で集められ、配達さ

れた。

二世である日本人の子供達は、日本語学校と同様にアメリカン・スクールに通う一方、彼等の両親を手伝うことを義務として期待された。マグリーン・キャンプで育った或る二世は、マノア・スクールの後、日本語学校に行かされたので、午後は三時以降に始まった。（中略）マノアにおける最初の日本語学校は一九一〇年、一三家族が一緒にリリオカラニ信託から借りた東マノア・ロード沿いの土地で創立した。創設者の一人がオキムラ・コウイチで、マノア日本語学校の管財人として、また永年にわたって学務委員会の委員長として尽力した。彼の息子のケンジラ一〇人の子供達は結局、日本語や文化を学ぶ放課後の学校に通った。学校は一九一〇年一月三日に二人の生徒で始まった。東マノア・ロード二八〇四の地で、木造の建物、ニクラスで設立した。マノアの二世の急激な増加につれ、学校も大きくなった。一九二三年では一七〇人の生徒と三人の先生がいた。一九三一年には、谷に推定で一〇〇〇の家庭があり、そのうち八〇〇が白人で一〇〇の中国人、日本人の家族は一七三に増えていた。多くの家庭では七人かそれ以上の子供がおり、日本語学校は必然的に土地の範囲と設備を拡大した。

一九二九年、日本語学校は借りていたマノアの土地を買う機会があった。しかしながら、その地所をいつどのように購入するかをめぐって二つのグループの間で意見の相違が起こった。一派閥が分離してマノア平和学園という別の日本語学校を設立した。新しい学校

はハウパラ通りに取得した地所に位置し、元の地所から二〇〇ヤードしか離れていない。生徒の約半分は新しい学校に去って行った。

教育の重要さは有益な結果となった。マノア・スクールと同じように日本語学校へ出席して、二世は高い動機を与えられ、野心的な世代となった。一九三一年にハワイ大学に登録した一〇四六人の学生のうち、三九五名が日本人の血統であった。(以下略)⁽²⁾(括弧内は筆者。筆者訳)

以上の記述は、主に低地マノアについてのものと思われる。二〇世紀の初頭にこの地にやってきた日本人は白人家庭の奉公人として働いた。次第に日本人が増えて一九一〇年に日本語学校が設立された。図1にみえる日本人小学校のことである。一九三一年における日本人の家族数一七三は、おそらく前述の国勢調査の低地マノアに相当する地域の数字と考えられる。なお、文中のオキムラ・コウイチは山口県出身の沖村幸吉のことと思われ、『防長人士発展鑑』(一九三六年)によれば、原籍地は玖珂郡柳井町(現在の柳井市)、現在地はホノルル市東マノア、職業は花作業となっている。⁽³⁾

②一九二二年の日本人年鑑にみるマノア地区の日本人

『布哇日本人年鑑』第一〇回(布哇新報社、一九二二年)の「在布日本人々名録」に掲載されている中でホノルル府のマノア在住者は一五名。うち勝沼富蔵(移民局通弁および獣医)と尾崎三七(尾崎商店

主)の二人は当時の有名人でマノアに住宅があった。一九一一年の地図(図1)にも彼等の住宅がみえる。勝沼住宅はモイリリに近く、尾崎宅は西側の山麓である。また、奥の方にみえる牧野住宅の持ち主は布哇報知社長の牧野金三郎であるが、この時の住所はホテル街で職業は薬店並通弁となっている。⁽⁴⁾また地図中の澤井は二名記載され、一人は尾崎商店員、もう一人はペ(イ)ンタ師で、いずれも広島出身である。その他の日本人は白人コック三名、農園主三名、牛乳搾・荷馬車業が各二名、庭園係が各一名である。やはり白人の雇用と農業が主である。

三、一九二〇年代以降の状況

①『MANOA — THE STORY OF A VALLEY』にみる日本人農家

日本人は次第にマノア谷の奥、つまり上部マノア地区に居住するようになり、一九二〇年頃から主に農業に従事した。その有様を前章と同じく標記の英文の書物の記述によってみてみよう。

マノア谷の日本人農家

マノア谷の中央東区画に入植した日本人移民は家庭奉公や小事業で生計を立てた。砂糖耕地から来た他の一世は独立農業に従事した。ピシヨップの地所が一九二〇年代にマノア谷の西側の奥二〜四エーカーの小地面の賃貸を始めた時、これら一世は少ない所得を市

場向けの野菜や花の栽培業者になるのに賭けた。一九二〇年代の小さなT型エンジンや他のタイプのトラックの大量生産により、自動運搬具がマノア日本人農業を可能にし、農民は容易に生産物をホルルのダウンタウンに運搬することができた。

一九三一年までにおよそ二百の日本人家族がマノア谷に住み、そのほとんどが野菜や花の栽培に従事していた。市場向け野菜園は「四エーカー」であった。そこにはまた三人の日本人の酪農業者がいた。そのうち二人はマノア谷でミルクを売っていた。マノアにいるこれら二百家族の日本人は、谷の西側の涼しく雨の多い奥の方で日本人農家と家族の小さな「居留地」を作り始めた。最奥の中央部にはバナナ栽培場があり何人かのフィリピン人が耕作していた。中国人が中央部のタロイモ畑を通常は借地で、徐々に管理するようになった。しかしながら中国人のタロ耕作者の多くは実際には谷に住まず、定期的にダウンタウンの中華街から通勤していた。対照的にイワサキ・ファミリーのシゲトとヤエジユは他の多くの日本人家族と同様、子供達と一緒に一九二五年から一九五六年まで上マノア谷に住み耕作した。

シゲト・イワサキは一八九六年に生まれ、一九〇二年に日本からハワイ島に移住した。妻のヤエジユは一九〇〇年に生まれた。シゲト・イワサキは一九一九年にプランテーションを離れて一年後ヤエジユと結婚した。一九二五年までにイワサキ夫妻はマノア谷に来て、そこで三エーカーの借地で七人の子供を養った。シゲトはこう

回想している。「私は大根、人参、さや豆、洗いも、ごぼうなど野菜のみを栽培しました。私達は夜に起きました。二時頃にはリバー街の卸売市場の注文に応じるために出発して走り下りました。家に戻るのは六時頃から七時頃でした。それから私はいつもカレッジ・ヒル地域で庭仕事に行っていました。私達は最初荷馬車で、後には私達のトラックとなったスター・セダン型自動車でダウンタウンに行きました。」

一世の農民は多くの自助共同体の堅い結束を作り上げた。「私達はNorth Manoa Farmer's Association（北マノア農業組合）を持ちました」とシゲトは説明した。「そこで定期的に会いました。その目的は暴風雨の後、橋や家が被害を受けた時など、お互いに助け合うためでした。私達は皆一緒に岩や丸石を集めて片付けました。最初六五人の会員がいました。」

シゲト・イワサキが作った上マノア谷の日本人居住者の地図は、一九三〇年代に八九家族が住んでいることを示していた。多くは一九一五年頃の早くから住んでいた。一九一〇―一九一五年に来た人達はランタナが深く覆っていたのを見たが、イワサキが来た時までにはそれはなくなっていた。近所の息子の一人が後に有名になった。アリヨシの家族は第二次大戦中にイワサキ家の上手のバナナ地域に引越してきた。「若いジョージ・アリヨシはのちの州知事である」。ゲール・イワサキ・カゲヤマは思い出した。「彼はマノア・スクールに行かず、マッキンレー高校に行った。すぐに学生団体の

会長に立候補した」。

農場の仕事はすべて両親によってなされたわけではなかった。「七人の子供達は農場で一生懸命に働いた」と、シゲトは強調した。「いつでも、彼等は学校から帰って、パン二個を食べ、仕事を始めた」。

子供達はマノア・スクールに行った。その後、マノア平和学園に行き、日本語学校には他の時間に行った。農場での仕事は午後四時からスタートした。多くの二世の子供達と同様に、イワサキ家の子供達はマノア・スクールで英語のファースト・ネームをもらった。ゲールは次のように説明する。「一九二八年に、このようなファースト・ネームは強制であった。私達はこれが(ハワイ)準州法であると告げられた。イワサキ家の子供達は本当にアメリカの名前をつけた。ダニエル(ボーンに因み)、アンドリユー(大統領に因み)、ベンジャミン(フランクリンに因み)、リチャードという名前が、生まれたとき病院で与えられた。私達は大統領ほど目立つことをしなかった。

イワサキ家の子供達の外出の多くはお金を稼ぐのと関係していた。ゲールは次のように述べている。「私達はくちなし、ひな菊、生姜で作ったレイを卒業式の時に売りました。私達は腕にレイをかけて歩道に立ちました。戦没将兵記念日には共同墓地に花を売りに行きました。いつもベレタニア街とプナホウ街の角に立ち、通行人に花束を呼び売りしていました。時々は一軒ごと花を売り歩きまし

た。歩道にあるマンゴーを盗んで家に戻りました。私達は走るのが速かった」。

「感謝祭の間、両親は息子達を連れて山に入り、赤い西洋ヒイラギの実、ときわ木、ティ(セイネンボク)の葉をクリスマスリースの準備のため取った。クリスマスの日には皆でシライシさんの後の山に行き、ハーブ(シダの葉)、竹、ユーカーリの葉を取って、新年に食べる餅の下に敷くモロバ(両葉?)を作った。私達は西洋きょうちくとう、松、竹、を探して、お寺の正面入り口に置かれている祭壇の花や門松を作った。他の家族と一緒に新年に向けての行事として餅をついた。幾人かが餅を大きさに切って、他の人が形を作った。私達はとても面白かった」。

シゲト・イワサキにとって一年の特別行事がお正月であった。「毎年、私達は農家の中央にあるテントの中で新年会をやりました。後にはムラモト家の土地の大きな部屋でやりました。私達はその土地を借りて建物を建てました。私達の仲間は年に一度ずつと新年会で会っています。最近はウイステリア・レストランです。話、若い世代が来ること、音楽、歌、おいしい食べ物、たくさんの喜び。私達はよくピクニックをしたが、仕事が忙しいからと言ってキャンセルしたことはなかった」。

もう一つの娯楽は写真であった。イワサキ家にはカメラがあり、家の近くに暗室があり、写真現像の手順を知っていた。彼らはマノアの過去の歴史資料に役立つ多くの写真を撮っていた。

食料を購入するために金を工面したわけではなかった。イワサキ氏は、マノア・ロードの五番目の角にあるフジセ商店で、毎月百ポンドの米を二袋と時々六つの塊のパンを買ったことを記憶している。ゲールも記憶しているように、「私達は土地からなる物はどんなものでも食べた。大豆、さつまいもなど、自分の家の庭から良い食料がとれた。私達は鶏肉以外の肉をそんなに食べなかった。卵や大根も食べた」。

電気が一九三五年にイワサキ農場にきた。電話は一九四〇年代半ばに取付られた。料理は木を燃やすストーブで行った。周りにたくさんあった材木の薪を使った。結局、便所は家の中と外の両方に持った。快適さはイワサキ家に徐々にやってきたが、郵便配達はなかった。子供達が日本語学校から郵便物を持って帰った。

ヨシカワ家は上マノア谷で一九二六年から始めた日本人家族であった。イワサキ家の土地の上手で今のパラダイス・パークのすぐ近くである。彼らは八く十エーカーの急こう配の土地を耕し、一人の女の子と四人の男の子の家族を養った。彼らは一九三九年に農業をあきらめて、ウッドローンの入口にあるプハラ・ライズに引っ越し、イースト・マノア・ロードに給油所を開いた。

上マノア谷のイワサキとヨシカワおよび他の八七の日本人家族は、みな大家族を養い、ホノルルに野菜と花を供給するのに大いに貢献した。彼らは今(二十)世紀の前半の間、肥えたままの土地を保った。その土地は最初三ヶ年、その後は毎月ごとの借地契約で

あった。

マノアの人口が増加し住宅不足が土地の価格を押し上げたために、農地としてよりも土地を分割して利用する方がより有益となった。マノア・ロードから分かれオアフ大通りの奥にあるプカオマオマオ地域にあるいくらかの農地は、早くも一九四八年に新しい地域になった。二十年以内に郊外居住者がほぼ全部、日本人農家に取って代わるだろう。彼等がマノアの変幻きわまりない過去に消えていくように。(括弧内は筆者。筆者訳)

文中の郵便物については、例えば前掲の『防長人士発展鑑』(一九三六年)をみると、マノア地区に住む山口県出身者の住所(連絡先)が「東マノア日本語校内」または「北マノア平和学園内」となっているのは、広い範囲内で個人の家に郵便物が配達されなかったことを示しており、この記述を裏付けるものである。

② 「北マノア農業組合」の記録にみる日本人農家

北マノア農業組合(North Manoa Farmers' Association)については、一九二〇年に日本からやってきて上部マノア谷に住む農民達によって設立された。彼等はお互いを知る必要があったし、まさかの時に助け合う必要があった。例えば、お葬式の助け合いや豪雨の時の洪水を防ぐために石の壁を助け合って作る必要があった。そして主なる中行事として、全部の家族による世代を超えた新年会があった。

この組合の記録が保存されており、一九二〇年から一九七四年まで日本語で、一九七五年から一九八六年まで英語で書かれている。例えば、設立当初（一九二〇年）の日誌によると組合の役員は次の通りである。

組合長 竹下鶴彦

副組合長 西猪之作

書記 上野傳蔵

会計 中野秋太郎

監査 村本鉄蔵

評議員 村上仙太郎 小林彦次郎 脇坂招次 上野巳之次 井ノ本

宇太郎、井田寅蔵

会長の竹下は、前章の『布哇日本人年鑑』（一九二二年）ですでに村本鉄蔵とともに農場主として名前がでている。発足当初の会員は五名とあり、前節中のシゲト・イワサキは岩崎重人と思われ、メンバーの一人である。また五六名（後の入会者を含む）の原籍も記載されているが、県別で見ると熊本二〇名、広島二名、山口一名、福岡五名、愛媛三名、新潟二名、岩手・富山・鹿児島各一名である。竹下や岩崎も熊本の出身で、熊本県出身者が中心的な役割を果たしていたと考えられる。

表1 マノア日本人職業別統計

順位	職業	人数
1	野菜業	26
2	農業	20
3	園丁（庭園働）	13
4	奉公	11
5	家庭奉公（女）	10
5	菜園業	10
7	労働	8
8	バナナ栽培業	5
8	雑貨商店主	5
8	商店（会）員	5
8	（白人）コック	5
8	事業	5
13	花園業	4
13	大工	4
15	養豚業	3

2人以下のもの省略。

『布哇日本人年鑑（第十七回）』（布哇新報社、1920年）の「在布哇日本人々名録（ホノルル市）」より飯田作成。

③一九二〇年の日本人年鑑にみる職業と出身地
『布哇日本人年鑑（第十七回）』（布哇新報社、一九二〇年）の「在布哇日本人々名録（ホノルル市）」に記載されている人達のうち住所がマノアとなっている人物の職業と出身地を調べたところ、次のような結果を得た。

まず出身県については、多い順に熊本五五人、山口三八人、広島二五人、福岡九人、福島六人、新潟・沖縄各五人、愛媛三人、神奈川二人、岩手・宮城・京都・島根・大分・鹿児島各一人であった。やはりハワイ全体と同様に西日本の四県が圧倒的に多いが、沖縄県が少ないのが注目される。全体人数は一五四人であるが、熊本・山口の両県のみで六〇%を占めている。

また、職業の内訳は表1のようであった。とくに野菜業・菜園業・

バナナ栽培業・花園業・養豚業など農業関係が圧倒的である。また、家庭奉公（とくに女性）、コックなどの仕事が目立つ。全体として近郊農業地域の様相を呈し、商店はほとんど目立たなかつたように思われる。

職業と出身地との関係では、とくに多数を占めていた熊本出身者については、野菜業が一名、農業が九名、菜園業が六名と多くそれぞれ全体の約半数を占めている。また山口県出身者も野菜業・農業が各五名で最も多く、花園業は全体四名のうち三名が山口県である。

なお、前節のモノア農業組合の記録にみる五六名の会員のうちこの人名録に記載されているのは二四名である（一族と思われる者も含む）。うち役員であつた竹下、西、村上など四名は菜園業、小林、脇坂など六名は野菜業、村本、上野（二人）、井ノ本、井田など七名が農業で、中野はオアフ生産会社会計とあり、この農業組合の關係のある会社と思われる。他に花園業、バナナ栽培業、養鶏業や雜貨商、事業、運転士などもみられるが、農業以外の仕事のものについては職業を変更したことも考えられる。例えば、運転士とあつた大久保長吉については、次のような経歴の持主であつた。「新潟県北蒲原郡加治村に生れ、明治三十九年五月来布、各種の事業に携わつて奮闘し、昭和の初め現在の地に花作業を始めて今日に至る。」とある。⁽⁶⁾一九二〇年当時は運転士をしていたものと思われる。花園業については、すでに森田榮『布哇五十年史』（眞榮館、一九一五年）に次のようにみられる。「熱帯國の一なるも布哇は四時貿易風の爲めに住み能き常夏の地

にして、草花の如き其種類も亦甚だ多し、布哇に於ける之等の生花栽培業は日本人の独占する所にして、花園專業として相當の成功を遂げし者も亦尠ならず、而して斯業栽培者の多くはホルノルノ附近にして、野菜業者の副業として栽培するもの亦多し、花の種類は多けれども就中バイオレット、ローズ、百合花、アスター等は重なるものにて、日本種類も尠ならず、殊に日本菊の如き良品を出せり⁽⁷⁾。場所は特定していないものの、日本人が相當さかんに行つていたことがわかる。また、バナナ栽培業の岡部喜一（山口県）および矢野熊太郎（福岡県）は『布哇日本人写真帖』（一九一六年）に彼等の農園の写真とともに次のように紹介されている。「経営者矢野岡部両氏は明治三十九年三月渡航ホルノル府モノアに於て芭蕉栽培業を經營し目下一万数千株ありて年々多大の利益を収めつゝあり⁽⁸⁾」。

四 一九二二年発行の日本語新聞記事にみるモノアの日本人

当時の日本語新聞である『日布時事』の一九二二年九月一日（第七四七〇号）とその翌日の二号にわたり、巡回記者による地方訪問記のシリーズでモノア地方が取り上げられた。それを以下に掲載する。

美しい自然に恵まれた

モノア地方在住者

独立事業家も多く邦人は約一千人在住す【一】

マキキハイトの右側から眼下すると、マノアは一の箱庭式ガーデンである。家屋の構造、緑色を呈した庭園、四角六角に区切られたるアスファルトの道路、赤、青、黄、白の種々様々に咲き満てる花、其所に絶えず通へ居るマツチ箱の如くに見える電車、おもちゃによく似た黒いものがよく馳走するのは自動車、之れ即ち生ける且つ動く一幅の絵画である。

山と山とが丁度蹄鉄型になり、其の奥には二三條の瀧が見える。

其の流れはマノアの中間を通り右に迂廻してモイリリに落つ。道路は右と左に分れ奥へ奥へと進んでいる。奥へ入るに従つてタロ田があり草原があり牧場があり野菜畑があり花畑がありバナナ畑がある。タロ田と牧場を除けば、あとは全部同胞の経営にかかる花であり野菜でありバナナであり秣である。或は養豚家あり養鶏家あり牛乳搾乳所がある。之れ皆同胞の汗と油と力との賜であらねばならぬ。

名にし負ふマノアの夜のじは、世界唯一の美しい虹姫の出現として、二重三重に橋とかかるので有名である。其の有名なマノア谷に同胞が約一千名近く居る。事業家が六七十名。家数が約二百余軒。而してマノア地方は五区に分割されている。先づ第一区内には、上下がある。即ち北マノアと南マノアである。先に下のマノアから紹介せんに、現在の区幹事は林氏である。林氏は牛と鶏を飼っているが記者の訪れた際は、可愛らしい子牛に乳を与へていた。

「さうですね、此の近傍には廿五六軒あります」と快く答へた。

即ち藤瀬商店を初め、秣を刈っている中村、自動車運転手の比嘉、パイプ仕事をする片嶋、川上の両氏、大工職の吉岡、増田の両氏、野菜屋の両中村、其の他事業家日雇人も多数あるが名を列記せば荒川、神山、岡谷、池田、樽本、高見、楠野、二ノ宮、藤本、松村、草村、市山、渡邊、梶川、西岡の諸氏が其れぞれ自分の職業或は他人の仕事に従事して居る。それより北マノアに到れば野菜作り業者が多い。

区幹事は西伊之助氏である。同氏はマノア瀧の下に居住しているので中々(?)遠い。何時も中間の脇坂氏宅集会すると云ふことで同氏を訪ふ。相にく留守中で他の人に問ふ。野菜業としては、村上、竹下、松本、宮本、池上、平嶋、村川、小田、嘉屋、木村、林、小林、上野、松浦、脇坂、村本、遠山、明石花屋、福田兄弟、同姓連人の竹下、林、松本の諸氏。バナナ栽培者は岡邊、住田、岩井、加瀬、森本諸氏が居る。其の他区会に加入せざる人には大重、竹嶋、木村の諸氏が居るといふ。其所を辞してから約二哩(マイル)を迂廻して第二区の沖村氏を訪問。

沖村幸吉氏は、第二区幹事であるが此の人も相憎家内全部が留守。仕方なく直裏の亀本氏に面会して問へば「多分皆で外出でせう」と云ふ。来意を明らかにして質せば、氏は喜び招いて答へて呉れた花作り専門の米重氏を始めに、他は主に野菜作り業である。即ち沖村、亀本、川岡、青野、坂本乳屋、石井、岡本、大亀、門廣、住田、原田、進藤、野見山、秋山、里方の諸氏であるが自分で土地

を買収して家業をいそしんでいるのは、沖村、亀本、野見山の三氏である。大抵はリースであると云ふが其付近一帯は実に綺麗である。

緑の山より吹きおろす、つめたい風は、綺麗に整えられた野菜畑、花畑の上を撫でて少しも暑さを感じないといふ此の地所に居住して専心事業に携はつて、永く居る人は十五年短くても七八年は定住している。つめたき土を踏んで朝夕事業の発展に努力し、花又は野菜物の太く伸びるが如く、種子を蒔いてから収穫を得るまでの楽しみは、実際に他人の知らない事である。然し或る年は天候に依り不作、或る年は上作と、これも自然の成すが儘に任して来たといふ。

田園生活者も矢張り同じく物価騰貴の際は、野菜物でも好況であつたが本年に至つて余り儲けがないといふ事である。此の地の山の根一帯は、チリンガム氏の土地であるがロットとして日本人には売らないと云ふ。主に白人ばかりであつて大部分は分割的に売払はれているが、総て住宅地であると、けれど未だ未開地が多数あつて将来は益々発展の見込めると云ふことである。

亀本氏の裏は支那人所有の墓地である。綺麗に掃き清められ、墓所好きの記者は暫し茫然と眺めた。其処を辞してより約一哩を戻り第三区に属する所謂マノア村に到る此の村に商店を開いて居るのは、沖永商店、岡村商店、益水商店、毛利理髪店等であるが、同胞の最も多数固まつて居るので村と名付ける所以である。

『日布時事』第七四七一号（一九二二年九月二〇日）

同【二】

マノア第三区の区幹事は金子増吉氏で、前にはマノア日本語学校がある。校長は大濱太氏、名誉学務委員長勝沼富造氏、副委員長沖村幸吉氏、書記中野秋太郎氏、会計村井秀五郎氏、其の他学務委員二十一名、学童は現在百八十名、教員は大濱氏夫妻である。

谷間の里は何となく日が短い心地がする。太陽がマキキハイトに隠れ、灰色の密雲奥の山の頂上を蔽ひ、山気冷々として身に迫る夕暮頃、独りたどたど大濱氏を訪れたのは六時頃であつた。氏は快く語る「左様、マノアは当校を中心として、何事に依らず父兄諸氏と共に一致してやつて居ります。就職以来未だ尚ほ一ケ年でありますが市中と違ひまして此のマノア村は実際平和であります。そして外人が入り込んで居らず、周囲の感化も非常に良好で亦質朴ですから時局問題なんか起ると総て真面目に研究し共同一致夫れに當るといふ有様です。又マノア青年会、処女会もありまして創立未だ三ヶ年でありませんが、総て真面目に事に当り漸次発展して行きます。処女会でも其の通り各自の修養に或る時は名士に依頼して講演会を開き、或る時は会合を催して親睦懇談に努め、段々と発展して居ります云々」

マノア青年会には毎月第二土曜日集会を催し、第三土曜日には活動写真を映写する。此の近傍の人々は市中へ出るにも遠く、出やうともしないので一般居住者の慰安に資する爲め、教育的フィル

ム、滑稽フィルム其の他面白きものを選んで映写するといふ。場所は青年会会館に当てた家屋があるので、其処に集会を催し映写し又お互ひに知識の修養に努めている。活動写真映写の際には幾分かの寄付を募集して夫れ夫れに当てる方法になつてゐる。亦月に一回はフリーで一般の観覧に供する事に行つてゐる。

同会の理事長は米重芳太郎氏、副理事長山中正一氏、理事古閑泰次、中嶋茂吉、会計渡邊一雄、監査梶山徳松、書記沖永三郎の諸氏であるが、各部所には文芸部荒木直人、柔道部後藤正雄、運動部山中、娯楽部沖本、矯風部講演部米重の諸氏、而して顧問としては大濱校長、沖村第二区長の両氏である。現在会員が約三十名あると云ふ。

処女会は、会長梶山キミヨ、副会長中村シズノ、会計沖村ミネヨ、書記竹下シズヨ、顧問として大濱氏が居る。会員は現在廿三名である。処女会も同じく毎月第二日曜日集会を催して前記の如く、親睦を計り各自の修養に努めお互ひの向上を計るにある。尚ほ大濱校長の語る所に依れば、青年会処女会にては集会の時日には必ず規定の人員が規定の時刻に誤りなく集合する事が何よりも好感を与え、秩序的に事を運んで行くと云ふ所を見て如何に真面目で質朴であるかが判ると語つたが、実際に周囲の感化が斯の如くある事を訪問の際、実験した一事がある。それは地方に居住している婦人が、道を問ひ人名を問ふ際にわざわざ出て来て家を教へ道を教え下さる事である。それが良風となつて子女に伝はる事実は明らか

である。濃情と親切と良民とは都会を離れた平和の村にのみある事を痛切に感じた。田園生活の人生味は真に此所にあるのである。

第三区に於ける定住者は白人家庭奉公人、日雇人も多数ある。金子、高橋、中嶋、上田、谷口、福谷、梶山、竹嶋、崎田（夕口田所有者）、福田、宮邊、西養豚、嶋田、山見牛乳搾取所、立山、有泉、木村、海、大濱、藤中、梅谷、岩崎、斎藤が二名、後藤、泉本、阿部、森本、益永、香川、倉西、金子、山本、米重、岡村、沖永、内田、丸山、城戸二名、澤井、清田、上村、兒嶋、毛利、岡本、岡村、栗原牛乳屋の五十軒余あり、此の外区会に入つてない人々も居住してゐるといふ事である。

第四区には、電車道十四番の角より二軒貝、リンゼー氏邸宅に勤務している木戸慶太郎氏が居る。氏はマノア五区における区長に推薦され在住同胞の為に尽力している人である。記者が訪問した際は、マノアに於ける同胞の所在地及び以前に事業家が、農業組合を組織して居り、而して相互間の利益を計り、又は親睦を深からしめんが為め、同会が組織されてあつた事実を詳細に語つて呉れた。而して事業家の方は、区幹事として西田久吉氏が居り、家庭奉公人の方には木戸氏が努力してゐるのである。

木戸氏の語る所に依れば第五区は殆んど奉公人が多数であつて始終出代りしてゐるので姓名を調査しても永くは其の家庭に居るや否やは判らないと云ふことである。然し現在では奉公婦人が六七十名も居るといふ。亦日雇人も廿四五名もある。（以下略）

(傍線 網掛け、太字は筆者。網掛けは北マノア農業組合のメンバー、太字は『布哇日本人年鑑(第十七回)』(布哇新報社、一九二〇年)の人名録に記載された人物を示す)

文中のマノア日本語学校校長である大濱太は『布哇日本人銘鑑』(一九二七年)によると、「原籍地は広島県安芸郡海田市町」で「明治四十五年広島県立第一中学を卒業、補習科一年を就業広島県師範学校第二部に入り大正三年これを卒へて教員生活に入り大正六年七月十二日招聘されて来布するまで広島県安芸郡青崎尋常小学校に教鞭を執っていた、布哇の人となるや加哇(カウアイ)島ハナペ日本語学校に赴任し大正十年一月転じてホノルル中央学院訓導となる、同年九月マノア日本語学校長に転じ大正十三年十一月フォート学園長となりて今日に至る(以下略)」⁽⁹⁾とある。ハワイは広島県出身者が最も多かった関係からか日本語学校長も広島県出身者が多く、彼もその一人であった。

なお『日布時事布哇年鑑』一九二七年版には、各種団体の中に「マノア區會」というのがみられ、理事長・坂本源次郎、副理事長・木村信太郎、会計・遠山作太郎、書記・竹島才次郎、米重芳太郎、監査・末広柳太郎、有泉竹次郎とあり、ほぼ上掲の新聞記事中に登場する人物で、坂本は牛乳屋である(広告参照)。同じ広告にみられる「東マノア組合」は、会長森本周一、書記原田禎一、会計青野代蔵の名が同年鑑にあり、彼等は新聞記事では第二区の住人のため、おそらく「東

マノア組合」はそのあたりに存在した組合と考えられる。なお、同年鑑には「マノア青年会」は組織名のみ、「北マノア農業組合」はなぜか掲載されていない。

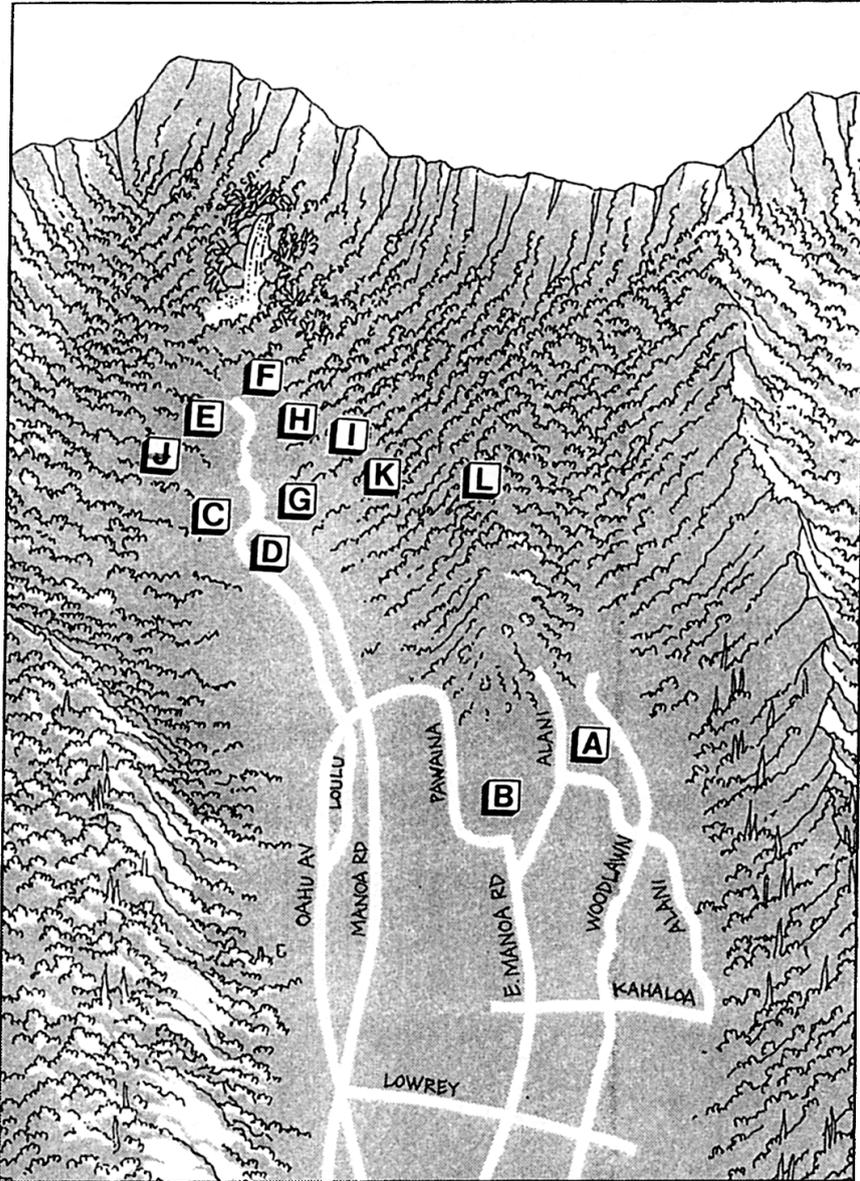
おわりに

マノア地方は五区に分かれており、第一区は上部マノアでさらに南北に分かれていた。そのうち北マノアは野菜栽培業者が多く、「北マノア農業組合」のメンバーが多く含まれる。

図2のCの地域で、谷の奥にあたり涼しい気候が野菜作りに適していたと思われる。第二区は亀本氏の裏が中国人墓地とあるので、図2のBの辺りと考えられる。これも第一区と同様に野菜や花の栽培を中心とした農業がさかんで「東マノア組合」を組織していたと思われる。第三区は図1の上部、マノア日本人小学校のあたりで、マノア日本人の中心地であった。いくつかの雑貨店や理髪店などもあったようだ。定住者は家庭奉公や日雇人が多かった。図1の下部にあたる日本人町のモイリリに近い第四区、第五区はさらに奉公人、日雇人が多く、定住者は少なかったようである。

マノア地域はワイキキからそう遠くないのに、ほとんどの観光客に知られていない。ハワイ大学の奥にあたり、筆者もほとんど行く機会がない。しかし行ってみると、ワイキキなど街中の喧騒とは違って変わった静かな雰囲気、いにしえのハワイを思い起こさせる。とくに

図2 UPPER MĀNOA VALLEY (上部マノア谷)



- | | | |
|----------------------------|-----------------------|--------------------|
| A - Woodlawn | E - Lyon Arboretum | I - Mānoa Trails |
| B - Mānoa Chinese Cemetery | F - Agee House | J - Birds of Mānoa |
| C - Japanese Farmers | G - Mānoa Stream | K - Wa'aloa |
| D - Ka'ahumanu | H - Rebellion of 1895 | L - Kahalaopuna |

ワイオリ・ティールームでは、トロピカルな庭園に囲まれ、過ぎし日のマノアをしのぶことができる。ここにかつて日本人農家が集まっていた面影はまったくなく、いまは優雅な邸宅や緑の庭園の並ぶホルルの郊外住宅地なのである。

注

- (1) 『最新布哇案内』、布哇案内社、一九二〇年、三八〜四〇頁。
 (2) MANOA - THE STORY OF A VALLEY, 1994, 161-164p.
 (3) 松田元介『防長人士発展鑑』、山都房、一九三六年、七七二〜七七三頁。
 (4) 彼については、藤井秀五郎『大日本海外移住史 第一編 布哇』、海外調査会、一九三七年、下編一六〜一七頁に、「明治十年八月廿八日に神奈川県横浜市青木町に生れ、同三十二年四月に布哇に來り、布哇島コナ及びパバアロアに一ヶ年暮して後、ホノルルに出で法律事務を執る傍ら、多年ホテル街又アヌ街角に牧野薬舗(後ピープルス・ドラッグと改称)を經營、他にも種々の事業に関係した。大正元年一二月には日刊新聞布哇報知社を創立して新聞界に乗り出し、苦戦奮闘廿数年、其努力は遂に酬ひられて今日の大を為すに至る、(以下略)」とある。
 (5) MANOA - THE STORY OF A VALLEY, 1994, 194-197p.
 (6) 前掲注(4)、八八頁。
 (7) 森田榮『布哇五十年史』、眞榮館、一九一五年、六一四頁。
 (8) 小野寺徳治他編『布哇日本人発展写真帖』、米倉彦五郎、一九一六年、一九二頁。
 (9) 曾川政男『布哇日本人銘鑑』、同刊行会、一九二七年、七四頁。

視 同胞五十年記念
 ホノルル市
東マノア組合
 組合員一同

『官報日本移民布哇渡航
 五十年記念誌』
 (日布哇事、1935年)より

視 同胞五十年記念
 ホノルル市
**北マノア
 農業組合**
 組合員一同

視 同胞五十年記念
 ホノルル市東マノア、ウアドロ
 ンパラ街二七六
坂本牛乳所
 所主 坂本源次郎
 電話九八八二五

ホノルル市
尾崎商店
 御賣及小賣
 本店は布哇に於ける最大なる輸入商なり
 ホノルル、市に雜貨店、酒店、鑛物店の三箇を
 有し
 加哇島、布哇島其他に數箇の支店あり

林三郎『布哇實業案内』(コナ反響社、1909年)より

